

**主題：CILに勤務する肢体不自由者の自立生活前後の「あきらめ」に関する研究**

立教大学 氏名 金 在根 (7611)

キーワード3つ：自立生活、肢体不自由者、「あきらめ」

**1. 研究目的**

本研究は、障害者の中でも、自立生活を送りながら自立生活センター（以下 CIL）に勤務する肢体不自由者の、自立生活前後における「あきらめ」について明らかにするものである。具体的には、自立生活の前と後の「あきらめ」の内容、そして、その「あきらめ」の背景について明らかにする。本研究を通して、現在自立生活をしている障害者が抱えている課題は何かを明らかにすることが出来るのではないかと考える。

**2. 研究の視点および方法**

本研究は、障害者の「あきらめ」は障害者を取り巻く人々や社会の影響によって構築されたものではないか、という社会構築主義の視点からとらえる。

研究方法として、CILに勤務する肢体不自由者を対象にした、半構造化面接調査法を採用する。研究協力者は全国のCILから一定の基準に基づいて18ヶ所のCILを抽出、CILに勤務する48人の肢体不自由者に協力を得ることが出来た。

**3. 倫理的配慮**

面接調査を実施する前に研究協力者に研究の目的、方法、調査内容を記した文書・資料を郵送し、協力を求めた。面接調査は、研究協力者の同意を得た上で実施した。また、研究の公開については、研究協力者の名前、所属機関等の個人情報には匿名にして研究協力者が特定できないようにすること、研究の公開をする際には本人の確認と了承を得た上で行うことにした。さらに、面接調査においては、質問の中で答えたくない項目については「答えなくてもいい」ということを伝えた。

**4. 研究結果****①研究協力者の自立生活前の「あきらめ」**

自立生活前の「あきらめ」の中で一番多かったのは「性・異性・結婚」に関する「あきらめ」であった。これは【自分の性意識に関する「あきらめ」】、【異性との関係形成・維持に関する「あきらめ」】、【性・異性に興味を持つことに関する「あきらめ」】の3つのカテゴリーに分けられた。その次は「余暇・趣味」に関する「あきらめ」が多かった。これは【体の動きと関係する「あきらめ」】と【体の動きと関係しない「あきらめ」】の2つのカテゴリーに分けられた。研究協力者の自立生活前の「あきらめ」の特徴は、「あきらめ」の背景に職員や親の存在があること、「我慢するのが普通」の状態になっていることである。

**②研究協力者の自立生活後の「あきらめ」**

自立生活後の「あきらめ」の中で一番多かったのは、「介助者との関係」による「あきらめ」であった。これは、【個人情報やプライバシーへの「あきらめ」】と【望む生活やライフスタイルへの「あきらめ」】の2つのカテゴリーに分けられた。その他には「あきらめ」

ることは「ない」という答が多かった。それは障害故の「あきらめ」が「ない」という意味であったが、調査時の語りからは「そうである」という事実より「そうであるべき」という自分に言い聞かせるような強い意志のようなものが感じられた。なお、「性・異性・結婚」については、「あきらめ」る人数は明らかに少なかったものの、自立生活前の「あきらめ」での3つのカテゴリーが同じように見られた。研究協力者の自立生活後の「あきらめ」の特徴は、介助者及び介助サービスが深くかかわっていることと、障害故の「あきらめ」はなく、「面倒くさい」からしないと思っている人が多いことであった。

### 5. 考察～研究協力者の自立生活前後から見える障害者の「あきらめ」

第1に、研究協力者の「あきらめ」に最も影響を与えていたのは、自立生活前は職員や家族（特に親）であったが、自立生活後は介助者となった。

第2に、研究協力者の自立生活前後の「あきらめ」の中で一番「あきらめ」ていたものは、「あきらめ」に最も影響を与えている「人」と関係していたことである。研究協力者の自立生活前に最も多かった「あきらめ」は「性や異性との関係形成」に関するものであったが、これらは家族や職員の価値観が大きく影響していたことが分かった。自立生活後に最も多かった「あきらめ」は、プライバシーや、ライフスタイルの問題が見られたが、これは、介助者との感情的衝突・葛藤よりもむしろ身体的または物理的欲求を我慢した方が良いと考えていることに起因していた。

第3に、『あきらめ』に代わる語りとその機能」の面で違いが見られたことである。研究協力者の自立生活前には「我慢するのが普通」であり「悔しくも辛くもない」という感情が支配的であったが、自立生活後には「面倒くさい」という表現を使って「しんどい思い」を回避し「楽になる」へと変化していた。自分の実現可能なことには意欲を示すが、その他においては最初から望みや欲求がなかったように扱うなど、「あきらめ」の内容を分析すると自立生活前の「あきらめ」と似かよった傾向が見られていた。

表 研究協力者の自立生活前後の「あきらめ」

内容 \ 時期	自立生活前の「あきらめ」	自立生活後の「あきらめ」
最も影響を与える人	職員、家族（特に親）	介助者
一番「あきらめ」ていること	異性との関係形成・維持、自分の性意識、性・異性に興味を持つこと等の「性・異性・結婚」に関すること	個人情報やプライバシー、望む生活やライフスタイル等の「介助者との関係」によって生じること
「あきらめ」に代わる語りとその機能	「我慢するのが普通」 「悔しくも辛くもない」という感情を保つ	「面倒くさい」 「しんどい思い」を回避し、「楽になる」